

## 名古屋一の繁華街から 時代に取り残されたシャッター街に

大須商店街は現在約1200店舗が営業しており、432人が大須商店街連盟に加盟しています。イベントに積極的に取り組み、去年の夏祭りは土日の二日間で35万人、秋の大道町人祭は38万人が集まり、大にぎわいでした。しかし今でこそ人の集まる元気な商店街ですが、かつては閑散としたシャッター街でした。

大須は江戸時代から門前町として栄えたまちです。芝居や寄席も行われ、戦前は映画館が20館ほどあり、名古屋一の繁華街としてにぎわいました。しかし戦災に加え、戦後の大規模な都市計画で名古屋駅前や栄が発展していくのに対し、大須は人の流れの途絶えた陸の孤島になりました。またテレビの普及は、映画のまち大須の衰退に拍車をかけました。名駅前や栄が近代的な商業エリアとして発展していくのに対し、大須は時代に取り残され、すっかりさびれてしまいました。

### 「アクション大須」が再生への転機

再生への転機は、昭和50年に立ち上げた「アクション大須」という取り組みです。第一次オイルショックも重なるどん底の危機感の中で、熱い商店主たちが、地域に入っていた大学の先生や学生さんたちの協力を得て、イベントで人を集め回遊させようと考えたのです。

大須はもともと門前町なので年配の参拝客が多かったのですが、地域に活気と華やぎをもたらすには若い人にも来てもらうことが必要です。それから一カ所ではなく、いろんな通りを使ってライブをやったり、<sup>かこ</sup>駕籠かきをしたり、あちこちで楽しいことをやってオール大須の取り組みにしようと考えました。それが発展して昭和53年、今に続く「大須大道町人祭」になりました。

# 「ごった煮」のエネルギーで 老若男女が さらに楽しめる大須へ



大須のシンボルイベントとして定着した「大道町人祭」



夏祭りの一環として人気急上昇の「コスプレサミット」

この時期、もうひとつ起爆剤になったのが昭和52年、第1アメ横ビルが映画館跡地にできたことです。若い人たちが集まる「大須電腦街」の大きな要因になりました。同時に地下鉄鶴舞線が開通し、豊田方面からの集客につながりました。この流れのなかで「大須カジュアル（オスカジ）」と呼ばれる低価格の衣料品や雑貨などを扱う若いテナントさんも増え、カジュアルで無国籍でレトロで、しかも活力のある「ごった煮の街・大須」が形成されたのです。

### 歴史や文化をもっと発信したい

おかげさまで、大須は元気な商店街だと言ってもらえるようになりました。しかしリーマンショック以降、売り上げは厳しくなっています。いま1200店舗が営業していますが、入れ替わりの回転が速いのです。人が集まるから売れるというわけではありません。本音を言えば、お金を使っただけの年配のお客さんに、もっと来てほしい。それには50～70代の方に楽しんでもらえるような企画や、大須本来の門前町としての歴史や文化を今以上に発信していくことが大切です。

大須は時代の流れとともに若者のまちになりました。同じように高齢化の進む時代に合わせ、そういう人たちがもっと楽しめるまちになっていくことも必要だと感じています。



大須商店街連盟  
会長  
今井富雄さん

いまい とみお / 1956年、名古屋市中区大須生まれ。瑞陵高校、南山大学を卒業。京都の老舗呉服問屋で修行のあと、家業の呉服店を継ぎ三代目店主となる。2011年、大須商店街連盟会長に就任。